

昭和二十四年七月十五日第三種郵便物認可
發行毎月一回十五日發行

(通第五十九号)

慈光

第六卷 第二號

目次

涅槃会を迎ふ……………	(1)
和を以て貴しと為す……………	花田正夫……………(2)
佛の淨土を憶ふ……………	福島政雄……………(7)
觀經說後の余瀝……………	長谷顯性……………(10)

涅槃會を迎ふ

四月八日は佛陀の誕生會、十二月八日は成道會、二月十五日は涅槃會に当ります。誕生、成道、涅槃は八十年の釈尊の生涯で非常に重大な時で、私共佛徒はこの聖日を期して、夫々に釈尊をしのび奉るのであります。さて二月十五日は御入滅の日であります。印度のクシナ城を流れるバツタイ河のほとり沙羅雙樹の下で、頭北、面西、右脇の御姿で入滅せられました。この御入滅の姿を涅槃像として世々に伝へ、深く慈恩を謝しまつる日であります。

涅槃像にも種々ありますが、佛陀の入涅槃の尊像を取り囲んで、佛弟子はもとよりのこと、あらゆる階級の人々や天人、さては鳥獸や虫類にいたるまで、所謂五十二類の生物が、歎き、悲しみ、慟じ、哭して居ります。

空中に姿を現じてゐる一比丘は、阿那律でありまして、天界にまします佛母、摩耶夫人に佛陀の入滅を報じ、佛母と共に空中より哭してゐる姿であります。

又佛辺近くあつて悲歎のあまり死人の如く力を失つて、他僧に支へられてゐるのが、佛弟子で生涯の侍者、多聞第

一の阿難尊者であります。

おそる／＼佛陀の御足に近づき、涙にぬれて佛足をおさすり申してゐるのは、何一つ御供養申すことも出来ない、貧しき者の報恩の姿であります。

鳥獸や虫類、所謂五十二類の生物が歎くのも佛画師の単なる誇張ではありませんまい。聖フランシスが毎朝雀に福音を説き、源信僧都の横川の草庵に鹿が馴れ陸んだ故実に照して、大聖釈尊の心光に浴する、生きとし生けるものの悲泣と追慕の情はほほ想像出来るのであります。釈尊の少年の日、庭に遊ぶ小虫を小鳥が喰ふのを発見せられて「何故生物は殺し合はずには生きて行けないのだらうか」と非常に悲しまれたと云ふ有名な逸話があります。この慈心が成長し發展し成就されて、遂に世尊としての御徳が自然に映芳してこの莊嚴があらはれたのであります。

時はすでに三千年。佛徒われは大涅槃像の前に跪坐してひとへに広大無辺の佛心を仰ぎ、わが身の奸詐な性を懺悔しまつるばかりであります。

和を以て貴しと爲す

花田正夫

三千年の昔、ギリシヤの一角に現れた哲人ソクラテスは「汝自身を知れ」との神言を高く掲げて、自分自身は「不知」の自覚に帰つて、永遠に人々の脚下を照す燈火を点じて居ります。このギリシヤの聖者と相ならんで徳光を長く深く地に放たれてゐる人が聖徳太子であります。

憶ふに千三百年の昔、日出づる国と自らの国を名告り出られて、隋の煬帝を驚かされた太子は、十七歳章の劈頭に「和を以て貴しと爲す」の実語を高く掲げられて、それは独り大和民族の進むべき白道であるばかりでなく、世界の全人類がひとしく手をたづさへて歩むべき萬古不易の大道であると、御自ら身証、体解せられての上に、ひたすら直指して居られます。

來る二月二十二日は太子入滅の聖日に相当いたしますので、日本の佛教徒のひとしく太子の洪恩をあらたに仰ぎ、長時の慈育を謝しまつる日であります。惜しむべし、太子はこれからも申すべき四十九歳の御年で、大陸から流行してきた疫病にかかられて入滅せられ、また太子の御看護

を昼夜に続けられた御妃も感染せられて、太子と殆んど日を同じくして亡くなられて居ります。太子の御徳に浴した国民は、太子の御入滅を親を失ふ子の如く悲しみ、なげきおしたひ申して居ります。その国民の心を代表する追歌^{追歌}に

いかるかの富の小川の絶えばこそ
吾が大君の御名忘れえぬ

と云ふ巨勢の三枝太夫の哀々胸をうつものがあります。斯うした二月の聖日を御縁といたしまして、太子の根本精神とも申すべき「和を以て貴しと爲す」の聖語を道味させて頂きたいのであります。然し私は御存じの通り絶学無為の徒、宿痾の身で學問とか研究などは及びもつかぬ身であります。唯譬へて申しますれば、医学のイの字も知らぬ無智の重病人が、太子と申す名医、祖師と申す看護人を恵まれて、絶えず医療と看護を蒙つて、必ず全治して貰へるといふ明るいたのもしい療養生活をさせて頂いてゐる実状を記録させて貰ふばかりであります。これが皆様の御生活に何等かの参考にもなればもつけのさいはひであります。

相対界の実態

佛が成道せられた時、大地は六種に震動し、虚空に自然の天衆が奏せられ、天女は無数の華を降らすといふ風に、天も地も人も一体にとけてやはらぐといふ趣があります。これこそ絶対の光明が相対界に顕現する風光であります。然し私共は先づ、相対虚妄の凡夫われと、われ等の実状を省みなければなりません。

さて人といふ文字からして、二人の者が互に相依つてゐる姿であります。われ／＼人間社会では、互にもちつゝもたれつゝ、相依り相扶け合つて暮すばかりではありません。ところか私も五十一歳となり、過ぎて来た歳月を省みますと、そのやうにいかないで、われひと共に傷つけ合ひ、いがみ合ひ、争ひ合ふ、といふ様な工合でそこに和ぎのひかりは見られないのであります。理想は常に破れて幻滅また幻滅の悲哀を性こりもなく續けて居ります。

その顛末を告白しますれば、始めは互に美しい理想を描いて近寄るのであります。ことに遠美近醜と申しまして、互に遠くで眺めて居りますと倚麗に映りますが、接近すればする程お互の缺点や醜さが見えて來ます。これについて忘れられない想出があります。それは私が学生の頃、佛教濟世軍の主唱者、真田増丸師を備後の鞆町の某寺に訪ひ、

三度四度と裏切りをむかれると、遂にはこちらの心が悪の方へころけこんで了ひます。それでるて自分の駄目さは棚にあけて、責任を相手にかぶせる。すると相手も相手でこちらを責める、そこに怨みから怨みの無限の対立抗争がくり抜かれ、上になり下になるどころこのあらそひが續く。ここまで來ると始めは柔かで温い心であつたものが堅く凍りついて了ひ、始めは明朗で活潑だつた身が、疑心暗鬼の闇路に迷ひ、遂には広い世界に身の置き所もなくなつて了ひます。

池山栄吉先生は「絶対他力の体験」に、この相対界の実状を次の様に述べて居られます。

『自分と人と対する場合には相手無理に強力を以ておさへつけない限り、心と心との相対になる。それは鏡と鏡とむかひ合せたやうなもので、互に累反射をつづける。

その累反射の結果、自然に出來るのが一種の復写真である。ところが銘々の胸にかけてある人形箱から、佛ばかりが飛び出したなら、それは当然佛が現像されよう。然し人間は打算的だ。悪貨は良貨を駆逐する。よしんば一方から佛が出たとしても、他の一方から鬼が出れば、佛の方は引込んで了ふ。佛の顔も三度といふ、代つて出るのは矢張

数日講話を聞いたことがありました。其時真田師の真劍さに感激した一人の青年が「先生の御伴に加へて下さい。どんな苦勞でも致します」と突然申し出た時、真田師は「富士は日本一の山と誰からも賞められるが、それは遠くで眺める時のことだ。山に一步入つて見よ、地肌は石コロばかりぢや。わしを遠くから表面だけ眺めてゐる君には、さも立派に見えるか知らぬが、近寄つて御覧、あきれはてた石コロばかりぢやよ」とすばりと答へられたことがありました。

さて遠美から近醜に転ずる、そこに大切であるが至難な問題が横はるのであります。ことに「一切の衆生は世々生々々の父母兄弟なり」と教へられる佛教では、かりそめに袖振り合ふのも多生の縁あればこそと知らされます。そう云ふ者同志が互に接近し、利害も密接な間柄になればなる程こんな人だつたのか、あんな奴だつたのかといふ風な現実曝露をきつかけとして、互に缺点を責め合ひ、不実をかこち始め、幻滅また幻滅と理想は崩れて行きます。

そこで若し私共に真実の親切心があれば、相手の缺点に同情し、飽く迄もその味方となり、遂には水を水に融かす如くに、相手を同化して了へるのであります。悲しい哉相対虚仮の心しかない身には、一度一度はよいにしても、

り鬼だ。

いはんや私達の胸の中には、佛の面だけは用意してあるが、活きてゐるのは鬼ばかり、たまには人間らしい面をかむつてゐるのがあるべきところであるのに、われひとともに、相手の出方をうかがつてるといふ始末だから、出來る写真にろくなものは滅多にない。

若し私達が真実の心をもつて人にむかふことが出來るなら、人も清淨の心を以てこたへてくれよう。が、悲しい哉私達にはその持合がない。一時うはべをごまかしても、仮面はつひにはがれる時がある。徹頭徹尾自己中心の立場に陣取つて、而も自由弄放な愛憎痴慢の乗する所となり、とかく我が田に水を引きたがる虚仮不実が、私達の本來の姿であつて見れば、それでどうして人との間に恒久の情誼が續けられよう。利害の相容れる間こそ、親密な交も続かうが、一朝それが相反するやうになれば、打つて替つて怨敵の間柄ともなりかねない。

自分と相手と同じ大きさの舟に乗つてると仮定して、自分が相手の船を押せば、相手の船が押退けられるだけ、こちらも舟も後に戻る。相手の舟を引けば、相手の舟の引寄せられるだけ、それだけ自分の舟も前に乗り出す。作用、反作用の運動の法則は、不実で押しへだて、利害で寄り近づく、人の心的交感にもあてはまる。これが人生五分五分

の交際といふもの、なんとあさましい現実であらうか。
たま／＼親子、兄弟、夫婦、親友などの間に、或美はし
い情意の投合が見出されるにしても、その不変性は必ずし
も保証されない。

のみならず困つたことには、もともと生身の闇柄だ。
「風葉の身たちも難く、草露のいのち消えやすし」何時死
王の手にへだてられるかわかつたものでない、無惨にも一
方が欠けて了ふと、一方は絲の切れた紙鳶のやう、やるせ
ない情緒のみが綿々として残る。

生者必滅、会者定離とは、誰しも心得顔であることだが
いよ／＼ほんとに自分が死ぬか、最愛の者が死ぬかといふ
段になると、かねての覚悟はどこへやら、今更のやうに周
章して四方八方遁路を求めても、百計つきたとなつた上は
萬斛の恨みを呑んで、死魔のなすがままになるよりほかし
かたがない。実に耐らなくなさけないものは人の世だ」
と心憎いまでに相対界の苦悩の実状を指摘されて、そこ
に永劫に浮ぶ瀬のないことを御自身の体験として述べられ
て居ります。

絶対他力の救済

私共は絶対善を求めながらその実行が出来ないばかりか
無常の嵐の前には地上の花のすべてがはかなく散つて行く
それでるて徹底した諦めも出来ない。その当然の帰結は、

それではこの浮ぶ瀬のない者、たすかるよすがの絶えて
無い者がどうしてたすけられるかと申せば、求めようとす
る心さへない者を、それをそれと見抜いての上に、不請之
友となり不請の法を恵んで下さるのであります。太子はこ
の不請之友の語を解かれて「地上の友は求めて相扶けるけ
れど、それではまだ不足である。佛は衆生の求めるさきに
友となつて下さる」と申されて居ります。親は子がその名
も顔も知らぬさきから子を念じ続けて、親子の切つても切
れぬつながりを結ぶ如くであります。
更に不請にして友となつて現れて下さる佛は、凡夫の身
に同入同化しきつて下さる、衆流に冥合して更に異趣なし
でひとつ流れにとけこんでちつとも交り目がない、また同
事の行とも云はれる、その慈心を注ぎに注いで下さるので
あります。

斯くて「衆生がたすかることによつて、佛も亦たすかる
成佛出来る」といふ誓を以つて向うて下さるのでありま
す。この誓のひかりを蘇我馬子に對し給ふ太子の御姿の中
に感するのであります。馬子は大閻族で飛ぶ鳥おとす勢で
あつて、横暴とおごりを極め、崇峻天皇を害し女帝を立て
太子をも無視するといふ、状態でありましたが、太子の生
命の奥底から無限に流出してやまぬ、唯佛是真のまことの
ひかりに、点滴岩をも穿つに似て、遂に佛を拜む身と転じ

行方の知れぬ闇路と、凍りつく牢獄の無期の虜囚をさだめ
とします。

然もそれは、私共がさうだと思ふからさうである、さう
思へないからさうでないといふやうな唯主観的な浮調子な
問題ではない、厳然とした相対界の実態である。法華經の
火宅三車の有名な譬に「火宅の内に於て嬉戯に乗著し、覺
えず、知らず、驚かず、怖ぢず火來りて身をせめ、苦痛身
をせむれども、心厭患せず、出でんと求むること、ろなし」
と説かれてあります。佛智による煩惱具足の凡夫の実態、
相對虚仮の実状への照徹であります。それは佛のかねてし
ろし召すところでもあります。然し我慢とうぬほれのかたま
りとも申すべき私共は、それをさうと自覚出来ないで「心
厭患せず、出でんと求むる心なし」といふ実状であります。

論語に「之をいかにせむ、之をいかにせむと云はない者
は、之をどうすることも出来ぬ」と述べてあります。聖書
にも「求めよさらば與へられん、叩けよさらば開かれん」
といふ有名な句があります。それは当然さうなので、自分
のことでありますから、真劍に求め、真劍に扉を叩くのが
本当であります。それなのに「心厭患せず、出でんと求む
ることろなし」でありますから、全く痴人、狂態と申すほ
かはない、これでは孔夫子の仁も、基督者の愛も、術の施
しやうもない、逆謗の死骸であります。

て居ります。この馬子の姿こそ凡夫われの代表者でありま
す。その者の悪業の全体を徹見し給うて然もそれをわが責
任とせられ「われにまこと無き故に馬子をどうしてやるこ
とも出来ぬ。かかる虚仮の身を佛のみよく捨て給はない」
との意に深く徹し給うては「世間虚仮唯佛是真」と常に仰
せられたのであります。

不請、同入、無限、の大慈悲、このひかりに相對虚仮の
暗黒界に夜が明けそめ、堅く凍りついた氷塊もとけ始める
のであります。ここに憲章第二の「篤く三宝に帰依し奉る
べし。それ三宝によりたてまつらば、何を以てまがれる
を直うせん」との太子の仰せは、求むる心すらない我等へ
の無窮無限の大悲の呼びかけであります。

佛の淨土をおもふ

五

福島政雄

維摩經には其の心の淨きに随つて佛土淨しとある。そしてそこに舍利佛を甚だ不徹底の人として描き出し、疑問を起さしめてある。釈尊は悟りを開いておいでになるから、釈尊の前に開ける此の世界は淨き世界でなければならぬのに、今此の国土を見れば随分きたないところが沢山にあつて、とても之を淨土と見ることは出来ませんが、それは何故でありませうとたづねる。

そこに梵王がゐて、それはあなたの心に一高一低があつて、心がしつかりしてゐないから此の世界がきたなく見えるのである。釈迦牟尼佛の佛土は清淨である。あなたが佛の智慧によつて之を見ないからきたなく見えるのである。あなたは自分の心のきたない姿を見てゐるに過ぎない、信心清淨にして佛の智慧に依つたならば此の佛土が清淨であることが見えて來ると。

その時釈尊は足指を以て地を按じたまうた。さうすると即時に世界の姿が變つて美しく見える。三千大千世界は百千の珍らしい宝を以て飾られてある。何とも言へない美しくは逆惡の阿闍世にも美しいところが見えるやうになる。此の世がすつかり淨土になつたとは言はれないが、悲しく淋しく痛ましい此の世に淨土の片影が感ぜられるやうになる。

此の世のいのちが終る時に即得往生であつて阿彌陀佛の淨土に往生する。それは十方億佛土を飛んで行くのではない。此の世において死ぬるそのままが淨土往生である。佛心の大悲によつて穢土にての命終がそのまま淨土への往生である。穢土は佛心に攝せられて淨土となる。往生人の心では西方十萬億佛土を念じてゐる場合もあらう。併し往生は即時である。間髪を入れない、そのまま淨土の蓮華の中に往生する。蓮華が開くといふのは佛の大悲に攝取せられて此の世を去り行く者の心持である。

法華經の見宝塔品において多宝如來の宝塔が出現して、釈尊が十方世界からその分身を集めたまはうとする時、娑婆世界が變じて清淨なりといふ場面がある。多宝塔といふのは佛の諸善萬行の象徴であらう。佛の諸善萬行が此の世にあらはれて、それによつて淨化せられて此の娑婆世界が淨土となる。それは私どもにもわかることである。それは此の娑婆世界の將來に理想の社会を期待するといふやうなとどではない。娑婆即常寂光土とも言はれてゐるが、その意味も、この地球上の將來において理想の国土を期待すると

い姿である。釈尊はそこで舍利佛に向つて此の佛土の嚴淨の姿を見よと仰せられる。舍利佛は未だ嘗て見もせず聞きもしない美しさでありますとお答へ申し上げる。

この場面をよく考へて見れば所謂穢土と淨土との關係がわかる。淨土といふのは飛び離れたところにある別の世界ではない。佛の智慧と慈悲とに照し出された三千世界は淨土となるのである。

淨土は此の穢土を離れて存在するものではない。穢土が転ずるところ淨土が現する。穢土は何によつて転ずるかといへば佛心によつて転ずる。私どもは此の娑婆世界に在つて、苦しいとか、悲しいとか、淋しいとか、またきたないとか云つて暮してゐる。韋提希夫人も、こんな苦しい娑婆世界を疾く去つて安樂の淨土に往生したいと言つてゐる。併し大悲の佛心が徹して來ると夫人はすつかり變つて來て、此の苦しい娑婆世界に落ち着いて逆惡の子阿闍世を心から世話するやうになる。これは佛心に依つて此の世界を見るやうになつたのである。佛心に照さるる世界において

いふやうな緩慢なことではない。此の苦しみの娑婆に即して常寂光土が感ぜられる。常寂光土は時間的に、又空間的に遠方にあるのではなくして、此の私どもの此の世に即して佛光裡に開けて行く世界である。今のこのままの私どもに佛のお慈悲を通じて感ぜられる世界である。

此の世は苦しいやな世界であるから淨土に行つて樂をしようといふやうな考は功利的といふか、逃避的といふか兎に角、我利我利根性の考である。佛法は無我にて候とある。自分が淨土に行つて樂をしようといふやうな考は我利我利である。尤もお經に此の世で苦しむと言つても須叟の間である。後には極樂世界に往生して樂しみ窮りなしたも説かれてある。併しその樂しみといふのは吾々が此の世で苦しいとか楽しいとか言つてゐるやうな樂しみではない。佛の御はたらきと一つになつて大活動をするといふ樂しみであつて、吾々の想像もつかない樂しみであるとおもふ。それは靜寂のきはみにおける大活動であつて、此の人生に広大なまことのいのちが染みとほつて行くはたらきである。私共は死の問題に当面して佛の慈悲を感じる時に、同時に淨土を感じる。私共は生きては淨土の返照を此土において感じ、死する時は淨土に直入する。此の世がそのまま淨土ではないけれども、此の世について離れずに淨土が感じられ、淨土が開けて行く。淨土は佛陀の慈悲の廻向に開

けて来る不可言の永遠の世界である。これが娑婆即常寂光土の味ひである。

六

華嚴経は廣大無辺な趣のあるお経であるが、これは釈尊の成道の佛眼の前に開けて来る三千大千世界の有様を述べてあるものと思はれる。三千大千世界は佛のさとり目の眼の前に淨土として現じてゐるのである。

第一に華嚴経の佛は毘盧遮那法身佛であるが、その法身佛がやがて釈尊である。釈迦牟尼佛が毘盧遮那佛が、毘盧遮那佛が釈迦牟尼佛かといふやうな關係になつてゐる。これは釈尊が全法界、即ち三千大千世界を悉くその証りの胸に攝めたまうた有様をあらはしてあるものと思はれる。

釈尊の証りの眼に映する全法界は清淨莊嚴である。釈尊は沈黙して居られるが全法界は踊躍歡喜してゐるやうである。十方世界から非常に多数の菩薩達が雲のやうに集つて来る。何とも言はれない莊嚴美の会座である。釈尊は沈黙のままであるが、そこに文殊・普賢その他の菩薩が次々に說法する。文殊の智慧、普賢の行と言はれるが、功德林菩薩の說法もある。人間界も自然界も皆ともに釈尊の成道を讚歎している姿のやうにも見える。兎に角成道の釈尊の前に世界は美しい姿を以て現じてゐるのである。

華嚴経前半は佛の三昧裡の風光を描いたものであると言

に美しいのである。

華嚴経の世界観は私どもの到底及びもつかぬものである。然るに大無量壽経はその華嚴経を縮約したものと云はれてゐる。その大無量壽経には此の世の逆惡醜劣の有様を徹底的に説いて、しかも此の世の衆生が淨土に往生することを説かれてゐる。それで私共は阿彌陀佛の願行によつて

觀經讀後の餘瀝

長谷顯性

この夏は、例年の通り法話会を開き、宮地廓慧兄を招いて佛教の大意に就いてお話をしていたとき、佛法聴聞のたのしみを心ゆくばかり味はうとおもつてゐた処、一寸した連絡の手ちがひからそれが駄目になつてしまつて残念千万であつた。あちこち案内を出したりビラを張り新聞広告したりして可成大々的に宣傳しておいたため、取消しにもか、はらず可成の方々が集つて來られたので私は申訳的に觀經に就いて話をさせてもらつた。佛教の大意といふ題目に因んで觀經の大意をうかばうといふわけ。羊頭を掲げて狗肉を売ることになつたが、自分一己にとつては今更ながらありがたくおもはれたことが二、三あつてひとり法悦

はれる。その三昧は海印炳現三昧と言つて、静かな海が萬物の姿をそのままに明かにうつし出すと同様に、佛陀の成道の眼には全法界はそのままの姿で佛眼にあきらかに現ずるといふのである。而して全法界の姿はあくまでも淨化せられた姿である。

殊に善財童子の求道となれば獅子奮迅の求道と称せられる。華嚴経の善財童子は、成道の釈尊における久遠の求道魂の象徴であると思はれるが、その求道の前には一切が善知識となる。真面目な修行者は勿論、医者とか、在家の婦人とか、小さな童子とか、異教の行者や、又は残酷な王様や姪女と思はれる婦人までも善財童子の前には善知識である。更に家庭生活ではその妃や母までが高い菩薩の境界の善知識となつてゐる。それ故善財童子にとつては此の世がそのまま久遠の求道生活の淨土であると云ふことになる。

此のやうに考へて來れば、釈尊はその成道の時から全法界を淨土と觀じたまうたものといふことになる。不徹底で迷うて居ればこそ此の世は穢土であるが、徹底して証つて來れば此の世はそのままに淨土である。かやうな道理が華嚴経にあらはされてゐるやうに思ふ。私どもは不徹底で眼暗く、何の修行も出來ないで、此の世のことに迷うてゐるので、此の世はあくまで穢土であると感じてゐるけれども佛の眼に映する此の世は全く轉じて美しく見える、又實際

穢土から淨土へ轉ぜしめられる。否私どものために穢土を轉じて華嚴経の世界のやうな廣大な淨土を開かれるのである。私どもは佛陀を信することによつて結局かやうの淨土に往生するのである。

昭和二十八年八月末日。

に浸つたことだつた。

今その一つ二つを述べてみたいとおもふ。申すまでもなく、觀經は釈尊が耑崛山に於て法華経の說法をなさつてゐた時その附近の王舎城におこつた一大悲劇を機として展開された経説である。王舎城の頻婆沙羅王の夫人韋提希はその愛子阿闍世のために劍を以て殺されようとし、幸にも耆婆、月光兩大臣の諫言によつて死傷の難はまぬがれたけれども王宮の奥深く閉置されるはめとなつてしまつた。さきに夫君頻婆沙羅王は太子阿闍世のために七重の室に幽閉されたが夫人は何とかして夫君を助けようと酥蜜を麩にまぜて身体に塗りこみ、瓔珞の中に蒲桃の水を入れてひそか

に王にさへてをられたが、三週間の後この事が露顯し遂に夫人も亦夫君と同じくとははれの身となつた。この世で最愛の子供に監禁されること程悲惨なことはあるまい。この愛僧のよりなす繩に身動き出来ぬやうにしぼりつけられた、自分も悲しき命運に泣くより外はなかつた。「我今愁憂せり」の一句夫人のこの時の苦悩のさまを如実に示してゐるやうである。かねて平安であつた頃王宮で釈尊の教化に浴したことをおもひおこし、「どうぞ私をお救ひ下さいませ。私はうれひなやみにうちひしがれて居ります。あなたにお出でをおねがひいたしたうございますがこんな処へはおそれ多うございます。せめてお弟子の目連尊者、阿難尊者をおつかはしなすつてお救ひ下さいませ」と耆闍崛山の方を向いて礼拝し泣き伏されたのであつた。

韋提希が悲しみの中に頭をもたけた時もう已に釈尊は目連、阿難の二弟子を左右にしたがへて夫人の前にお立ちになつてゐた。韋提希は釈尊を見ると自ら璣路を絶ち全身を前にかけ出して大声あけて泣きながら「私は昔どんな罪があつてこの悪い子供を生んだのでございませう……どうぞ私のために『うれひなやみのない処』をおしへて下さいませ。私はそこへゆきたいでございます。この世界はもういやでございます。全くこの世界は地獄・餓鬼・畜生が一ぱいひろがつて悪い者ばかりでございます。私はもうこんな

悪人にあいたうございませぬ。悪人共のいふことも聞きたくありません。どうか苦しみ悩みのないきれいな楽しい処をおしへて下さいませ」とおねがひしたのであつた。こゝに釈尊の説法が始るのである。經典を読むと程とよくうなづかれるところと、又何のことかわかりかねるところがある。私にとつてはうなづかれる方よりも、うなづけない方が多い。否卒直にいふとすなほにうなづけるところが余りにも少いと告白せざるを得ない。殊にこの觀經は何のことかわかりかねるところばかりなのでいろ／＼講釈を読んだり講話を聞いたりが何かしつくりしないで困つてゐた。それが今度はからずも觀經の説法の始まる因縁を説かれた所謂序分義を読んでゐる中にハッと心の中にうたれたところが二ヶ所あつた。その一つが韋提希夫人が「うれひなやみのない世界」を願つて居られるといふことであつた。これは後程になつて釈尊が阿難と韋提希とに向つて「佛はお前たちのために除苦惱法をくはしく教えてあげよう」といはれたその除苦惱法と照應するものであらう。佛教の大意一八万四千の法門といはれるがそれも要するにうれひなやみなき世界を教へられたに外なからう。釈尊一代の説法の所詮この苦惱解脱の法より外なかつたにちがひない。

さてこの苦惱を除く法について二つの道が教へられてゐる。

るのでないか。その一つは智見を開いて苦惱の本体を照破して苦惱を超越する道である。そしてもう一つは自己の全体をあけて信するものにさへけてゆく道である。韋提希夫人の五体投地のすがたを自分にひきあてつゝ、私はこんな話をおもひ出すのであつた。それは有名な話である。ある人が悟道に達した人に問うた。「夏は熱くて困ります。冬は寒くて困ります。何とかならぬものでしょうか」すると言下に「熱ければ熱くない所へ行つたらよい、寒かつたら寒くないところへ行つたらよい」「そんならどうしてそんな所へ行けませうか」「さよう寒い時は寒さになり切れればよく熱い時は熱さになり切れればよい」かう答へたといふことである。これは涼しい風がほつた頬をさつと撫でて行くやうな気持のよい話である。又こんな話もおもひ出されて来る。達磨が面壁九年の後一人の求道者を得た。それは慧可であつた。彼は人生の問題に煩悶しはるばる明師を求めて達磨に参じたのであつたが許されなかつた。そこで意を決して片腕を切りおとし死を決して教へを請うた。達磨はこれを見て始めて相見を許した。達磨は問うた。「お前は一体どうしたいといふのだ」「私は自分自身が苦しくてたまりません。どうしたらこの苦しみをのがれられませうか」「さうか。それなら自分といふものをこゝへ出してみよ」慧可ば言下にさつたといふ。これも亦愉快な話であ

る。これらの二つの物語は苦惱超克の道を教へて妙である。苦惱はあるべき姿にありては生じない。苦惱には実体がなく。随つてその正体を見届ければ苦惱は苦惱でなくなるのである。たしかに釈尊が勤苦六年の後菩提樹下の吉祥の座に端坐して大悟徹底されたことはこの苦惱の実体の照破にあつたらしい。化け物の正体見たり枯尾花。苦惱に実体はないのだ。ものありと執着してゐるところに苦惱はおこる。苦惱もとり実体なしといふ智見が生ずれば苦惱はもう苦惱でなくなる。かく教へられてゐるやうである。今この觀經はこれとば大いに趣を異にしてゐるやうにうかゞはれる。韋提希夫人は苦惱にせめつけられて自分の安心のところがない。たゞひたすらにこの苦惱をのがれたいといふ切なるおもひのみである。自己を諦観しこの人生を如実に見る力は到底もち合はさない。この苦惱に泣くより外なき韋提希は釈尊の眉間より放ちたまつた光を見てそこに阿彌陀佛の世界をおがんだ。お經に説かれてゐるところは象徴的であるがかういふことが示されてゐるやうにおもはれる。苦惱に沈んでゐる自分をどこ／＼までもすくひとらうといふおあはれみのお心が苦惱の自分の上にさん／＼とそゞがれてゐること、いな自分の苦惱をすべて荷うてその苦惱をこえさせようといふ大きなお心が自分になり切つてゐられることを感得したのである。韋提希のこの感得はやる

せなき自分を抱いてた、一すぢに何かによりすがらうといふ純なる心の上にとこんぐまでも苦悩を救はうといふ切なる悲心がつきとほつたといふより外はない。而してこの章提希のたどられた道こそ真に苦悩に泣くわれら凡夫の救はれてゆくべき道ではなからうか。

次に観經を読んで感じいつたことの、一つは釈尊が西方極樂世界の阿彌陀佛のみ許に生れようとするものは三福を修せよとす、められてゐることである。そしてその三福としてあげられてゐるのは一に父母に孝行し師長を尊敬し慈心を以て殺生せず十善業をおさめること。二には三帰を受持し戒行を完全に保ち威儀を犯さないこと。更に三には佛たらんと發心し因果を深信し大乘を説誦し行者を勸進せよとある。所謂世戒行の三福をす、められてゐるわけである。私は今までこれら經説をかりそめに読んで来たことを恥ぢている。一体これはまた何とおどろくべきことであらう。苦悩を除く法はこの三福を修するにある。「この三種の業は過去未來現在三世の諸佛の淨業の正因なり」釈尊の慈訓は嚴としてのたまふ。私はこの釈尊の教説に耳をかたむけようとしつゝ、もこの教説を迂遠なりとし何か他に除苦悩の妙法があるといふおもひにとらはれる。今そのうち最初に示されてある「父母に孝行せよ」の一句のおしへをおろそか

の御心が父母に孝行せよとの經説となつてよびかけてゐて下さることを感ずる。自分が苦悩の生活にうちひしがれながら苦悩をこえてゆく道が開かれてゐることを気づかされるのである。

完。

無舌居士

天龍寺の滴水和尚が上京したとき、三遊亭四朝の一席を聞いたが、そのあとで「四朝さん、あなたの話は大変うまいが、しかしみな舌先の話じゃ。その舌を離れなければ本當にうまいとはいはれぬ」といつた。

四朝が不満さうな顔をしてゐると、そばに居た山岡鉄舟が「今わしがあんたの舌を抜いたらどうする」。四朝おどろいて「私の今日あるのは、この舌のためです。舌を抜かれたら飢死するだけです」。それで鉄舟から「お前は本當の落語家ではなかつたのか。何で区々たる舌にのみ頼るのか」と無刀流の奥義を聞かされ、悟る所があるのを見て滴水和尚の所へつれて行かれた。そこで四朝が禪師から貰

つた名が、無舌居士であつた。

「朝日新聞より抜」



にしてゐるではないか。この世の父をうしなつてから十幾年になる。老いたる七十九才の母がある。今なほ健在であるがこの母にどんなおもひで對してゐるであらうか。母は耳がとほい。その上生來の文盲でこの世の事情に甚だうとい。それで自分は心の中で母をながしろにしてゐる。それが行為動作にあらはれて母の心を安じしめてゐない。これは事實である。しかも私は苦悩なき道を求めてゐるのである。一体それは何を求めてゐるのであるか。他の人にほめられて苦悩がなくなるだらうか。お金をもうけてといふのであらうか。うまいものを食べてといふのであらうか。きれいな着物を着たいといふのであらうか。立派な住居をかまへたいといふのであらうか。或は立派な行為をしたいといふのであらうか。世の中のためにつくさうといふのであらうか。世界平和のために貢献しようといふのであらうか。おもひこゝに至れば狂の中の狂、愚の中の愚といはねばならない。自分のたつた一人の母をすらその心を安じることができない身である。世界平和とは本末顛倒も甚だしいではないか。世の中のためといふは何のことか。立派な行為をしようとはどんなことをするのか。私はこの「父母に孝行せよ」との經説によつて自分といふものにふりかへしめられ父母に孝行出来ない自分を見出す。そしてそこに孝行出来ない自分に飽くまでやるせなき悲心をたれたまふ佛

編集後記

暖冬異変の中にもさすが大寒に入りました。

斯うしたなかに佛の涅槃会を迎へ太子の忌日を眼前に致しました。

和国の教主聖徳王広大恩徳謝し難し一心帰命し奉り奉讀ひまなくつとむべし

との祖聖の御声が耳底にひびく想ひがいたします。太子を久遠の父母と慕はれた心であります。顧みますのに現在の日本で、太子の精神を深く渴仰し、広く地に潤へかすと切に念じ給うて、日夜にその努力を続けられてゐる方々は多いことでありませうが、先づ福島先生、白井先生、両先生には私が親しく導かれてよく存じ上げて居ります。其他著書で拜見して知る方に五十嵐祐宏氏、毎田周一氏、花山信勝氏、井上善左衛門氏等が居られます。今は亡き方に近角常観師、佐伯定胤師、姉崎正治師は申さずもがなであります。

今年は特に皆様方と共に太子の御遺訓を身に蒙りながら白道の旅を続けさせて

頂きたいものと願つて居ります。

△「浄土を憶ふ」の福島先生原稿は私

共に種々な味ひを開いて下さいました。重ねて申し上げますが「浄土の莊

嚴」の著書から頂いた一篇であります

発行所は 京都市下京区花屋町西洞

院。永田文昌堂発行。定価百円送料十

六円。御照会申上げます。

最近の先生の御歌に

うらぶれの年は暮れ行けど学びの道ひ

たすらに進むところは止まず。

斯の道やわが進む道日の本の国の力と

なりぬべき道。

二首を頂き感激して居ります。

△「観経読後の余瀝」は畏友長谷顯性さ

んの信味で、有難く頂きました。私と

は二十五年もの間信交を頂き、そこ

に佛慈の無限の加護を被つて、白道の

伴侶となつて下さつて居ります。赤尾

道宗の生国に近い富山県東砺波郡山野

村繩之内が御住居です。

△「和を以て貴しと為す」は太子の忌日

を迎へ、現に被る太子の慈恩を讃仰致

しました。仰せは一句語であります。

その一句が身にひびき心に徹し、日々
に信味させて頂けるには広大無辺の慈
育によることでありませう。誌しました
僅かの文意を御縁に直接に太子の御書
から御導きを仰いで下さるやうにと念
じつつ筆を擱きます。

昭和二十九年二月十日印刷
昭和二十九年二月十五日発行

毎月一回十五日発行

一部 十七円(郵税共)

定価 半年 百四(郵税共)

一年分 二百四(郵税共)

名古屋市南区駈上町二ノ二八

編集兼 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 奥川 正生

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八

一道会館

発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番